

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## マイ・ビッグ・ファット・ウェディング

配給/ワーナー・ブラザーズ映画

2003 (平成15) 年8月5日鑑賞

Data

監督: ジョエル・ズウィック

出演: ニア・ヴァルダロス/マイケル・コンスタンティン/レイ

ニー・カザン/ジョン・コー

ベット

### 👁️👁️ みどころ

30歳のギリシャ系のさえない女性にギリシャ彫刻のような顔立ちのハンサムな「王子」様からの求愛だが、問題は彼が「非ギリシャ系」であること。「ギリシャ人の血を誇る」頑固な父親は、絶対にそんな男性を受け入れない……。しかし愛は勝つ！主演女優ニア・ヴァルダロスが自らの体験をもとに脚本を書き、トム・ハンクスが映画化権を買い取ったものだが、低予算で大ヒット！ハリウッド映画のあり方に一石を投じた、楽しい良心作だ。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

#### <脚本と主演の二足のわらじ>

この映画の生みの親は、1962年生まれのギリシャ人女性ニア・ヴァルダロス。彼女は自分が30歳の時に非ギリシャ系（プエルトリコとユダヤ系でニューヨーク州の北部の出身とのこと）の男性と結婚して、夫をギリシャ正教に改宗させたらしい……。

その自分の体験を脚本に書き、自らロサンゼルスで一人芝居を上演した。そんな彼女の動きを、ギリシャ系の女性と結婚していたハリウッドの大スター、トム・ハンクスが聞き、1997年の舞台を見て気に入り、1998年に映画化権を獲得したというわけだ。

見事に変身する女主人公を演ずるのは、40歳となるニア・ヴァルダロス自身。『恋人たちの予感』（1989年）、『めぐり逢えたら』（1993年）のメグ・ライアンや『プリティ・ウーマン』（1990年）のジュリア・ロバーツのような、さらには最近の『メラニーは行く！』（2003年）のリース・ウィザースプーンのような、魅力的なヒロインではなく、本当にさえないオバサン（失礼？）がヒロインとなったのだ。

## <人種のるつぼの国アメリカ>

アメリカは人種のるつぼの国。『ギャング・オブ・ニューヨーク』（2003年）を作ったスコセッシ監督もイタリア系だし、『ゴッド・ファーザー』（1972年）のコッポラ監督もそうだ。そして、あの『ウエスト・サイド物語』（1961年）のジョージ・チャキリスはギリシャ系だそうだ。他にも、人種のるつぼの国アメリカには、スペイン系、オランダ系、中国系、日系といくらでもいる。『ヒマラヤ杉に降る雪』（1999年）は日系人の悲しみをベースに、工藤夕貴が熱演した美しい映画だった。

もともと、どんな国の人間も受け入れる、とカッコいいことを言っている、それは表面上だけ。本質的な部分での「人種差別」は歴然と存在する。しかしそこは、自由の国、個人主義の国、実力主義の国、そして競争の国アメリカ。頑張れば成功する確率は他の国に比べれば高いことは間違いなし。

この映画のヒロイン、トゥーラを含むポルトカロス一家は、アメリカに渡って今や大成をおさめていた。

## <ギリシャ人とその特性>

ギリシャ人は、我々日本人には馴染みが薄い、この映画を観れば、そのギリシャ人の特性と傾向がよく分かり、興味深い。

今はアメリカのロサンゼルスに住む、主人公トゥーラ（ニア・ヴァルダロス）の父ガス（マイケル・コンスタンティン）は、たった8ドルの所持金でアメリカに渡ってきた。そして今は、「ダンシング・ゾルバ」という名前のギリシャ料理のレストランを経営し、大成している。ガスの大鉄則は「ギリシャの血を誇ること」。そして言葉は、どの単語もすべて、ギリシャ語にその起源があると信じている頑固者。またトゥーラのいとこは何と27名。大家族主義だ。そして、「家長は絶対」という信念をもっているが、何の何の、妻のマリア（レイニー・カザン）もしっかり者。「家の“頭”は男でも、“首”は女なのよ」と言って、がっちり陰の力をキープしている。

そんな両親の悩みの種が、30歳になるのに、結婚もせず、仕方なくレストランで働いている二女のトゥーラ。今日も父親は娘に「おばさん臭い！」とイヤミだ。もともと、娘の結婚相手はギリシャ人男性であること、そして結婚式はギリシャ正教の教会で行うことが絶対だから、「制約」も多い。

この映画からわかるギリシャ人の特性その1は、よく食べ、よく騒ぐこと。そしてパーティ好きだ。特性その2は、ギリシャ式結婚式はイタリア式に負けず劣らずビッグ・ファット（大仰な）ことだ。

## <30歳のさえないオンナが大変身>

恋もあきらめ、人生もあきらめかけながらレストランを手伝っていた30歳のトゥーラ

が「凍りついた」のは、レストランの客として入ってきたイアン（ジョン・コーベット）をはじめて見たとき。何とギリシャ彫刻のような、美しい顔だちをしたハンサムな男性だ！トゥーラはたちまちイアンに一目惚れ。しかし当然イアンはトゥーラのことなど全く見向きもしなかった。

そこでトゥーラは、「自分の人生を変えられるのは自分自身だけ」と大変身を決意！第1は生き方のチェックだ！まずは父親を説得して大学に通うことを承諾させ、コンピューターをマスター。次には、おぼさんが経営する旅行代理店へ転職し、これを一人で切り盛り。第2のチェックは女を磨くこと。まずはダサい眼鏡をコンタクトに。そして化粧、ファッション、髪型を一変した。エライもので、自信を持って仕事に立ち向かっていると内面から生き生きとした魅力が生まれ、さらには化粧、ファッション、髪型が一変すると、あのブス(?)だったオバサン(失礼?)が、美女とは言えないまでも、それなりの魅力ある女性に・・・。

旅行代理店の前を通りかかったイアンは、トゥーラを見つけると、興味を示し、デートのお誘い。そして後は一直線。二人は恋に落ちた・・・。

### <話は単純。しかし単純だからいい>

本当にストーリーは単純。恋に落ちた2人が結婚式に至るまでの「ドタバタ」を楽しく描いていくが、この映画を面白くしているキーワードがギリシャ系ということ。これは別にギリシャ系ではなく、イタリア系でも中国系でも応用はきくが、非ギリシャ系のイアンが全面的にギリシャ系を受け入れていくことによってハッピーエンドになるというトゥーラの体験をユーモアたっぷりに描いている。

こんな優しい男性がいたら・・・と女性なら誰しも願うだろう。世の中はきっとこの映画ほど甘くはないだろうが、女性にとって一時だけでも自分の夢を満たしてくれるこの映画の楽しさは格別だろう。

### <低予算、有名スターなしの映画の大ヒットが教えるもの>

女性の夢を満たしてくれる、ユーモアたっぷりのラブロマンスだからだろう。この映画は、500万ドルという低予算で、有名スターの出演なしにもかかわらず、2002年にアメリカで公開されるや大ヒットし、2億ドルの売上を達成したとのこと。ちなみに2002年にアメリカで公開された映画で、2億ドルの売上をあげた作品は、売上げトップの『スパイダーマン』の他、『ハリーポッターと秘密の部屋』『ロード・オブ・ザ・リング/二つの塔』など6作品しかないそうだから、いかにこの作品がすごいかわかる。

今、ハリウッドの映画制作の現場では、新しい企画のあてはずれの危険を避けるため、安全を狙い、ヒットシリーズのパートⅡ、パートⅢばかりを作っている。『マトリックス』『チャーリーズ・エンジェル』『ターミネーター』『トゥーム・レイダー』等々だ。さらに、

一作短期集中収益型となっているため、膨大な制作費の他に膨大な宣伝費をかけて上映館を拡大し、一挙に大ヒットさせ、短期に投下資本の回収を狙うパターンが増えている。しかしこのようなハリウッド映画の作り方や公開の仕方に一石を投じたのが、この『マイ・ビッグ・ファット・ウェディング』だ。

観客が前宣伝に踊らされるのではなく、観客が「自ら観る映画を選ぶ」、そんな当たり前の映画作りが、今求められている。

2003（平成15）年8月6日記